

しぐさ文化の認知と問題点

平澤洋一 (城西大学)

多文化について調査した。本稿ではくしぐさ文化>に対する日本人若年層と外国人若年層の認知を比較し、かくれた小文化の意味論的距離を測るとともに、小文化の体系化を試みた。文化の小体系は結合して、より大きな体系を生成する。今回の多文化調査から、若年層の被験者にも伝統文化継承型の認知が引き継がれている一方で、西欧型の文化の受容により個々人の文化認知には大きな差異が観察された。文化は意味論的に数量化し体系化して日本の伝統的文化の、視覚的に捉えることができる。文化は「成立条件」「言語」「行動・変化」「画像・映像」「増幅表現」「心理」などの要素とともにコミュニケーションを形成する。

The recognition of the behavior culture and problem

Yoichi HIRASAWA (Josai University)

I tried the systematization of the small culture with measuring the semantic distance of the small culture which gave me the recognition comparing Japanese and foreigner against the behavior culture. Culture becomes quantity semantically, and it is systematized, and it can be caught visually of the Japanese traditional culture. Culture forms a communication with an element such as "the term of formation" "language" "behavioral change" "image" "amplification expression" "mentality".

1 はじめに

熊倉千之氏は『日本語中級』⁽¹⁾の中で「体全体やその一部分を動かして、自分の気持ちや考えを表すこと」を「身ぶり」といつている。人間の身体表現は広範かつ複雑であるが、さまざまな文化を映して興味深い。本稿では手足と頭部を使った表現動作をコミュニケーション論的視点から考察する。手元にある辞書『岩波国語辞典』(第四版)には、「しぐさ」は「①やり方、しうち、②身振り、俳優の動作、所作」とあり、「身振り」は「体を動かして、それで感情・意志を表し伝えようとする動き・姿勢

とある。「しぐさ」の意味説明の②に「身振り」があり、両語の意味領域の一部に重なりがあるわけだが、「身振り手振り」といういい方があるから、手の動きを「手振り」、体全体の動きを「身振り」でおおまかに意味分担し、それらに「やり方、しうち」「身振りの一部」加えた意味領域⁽²⁾を「しぐさ」と呼ぶことにする。

多文化調査は、3期に分けて実施してきた。第I期調査は平成4年で、自然・色彩・動植物・人間生活・行動など52問・226項目を調査した。被調査者は日本人学生212名、外国人留学生34名、計246名であった。

第II期は、第I期で顕著な認知差の見られた

26問・86項目に絞って、平成6～10年に調査した。被験者は日本人若年層123名である。

第Ⅲ期は平成12～15年、外国人留学生の数を増やす一方、日本人の範囲を全国に広げ、被験者数231名をメドに調査・分析を続けている。本稿では第Ⅰ期調査結果の一部をもとにして、文化のデジタル化、小文化の体系化、小文化の結合における体系の保存、小文化におけるコミュニケーション変数について考察する。

2 文化のデジタル化

しぐさ文化の一部については、これまでに触れた⁽³⁾ことがある。本稿ではそれを発展させ、第Ⅱ期以降でも継続調査している項目の中から意味的関連性の高い項目を分析することにする。

<しぐさ文化1>

次の「しぐさ」は何を表すか。

- (1) 円を描くように頭を回す。
- (2) 人差指を額の方に向けて円を描く。
- (3) 頭を前に深く傾け「8の字」をえがくように回す。
- (4) 手の平か手の甲で口を覆う。
- (5) 頭の横か後ろを搔く。
- (6) 両手の人差指を「こめかみ」の両脇に立てる。
- (7) 頭を少し傾け片手または両手で目を覆う。
- (8) 目を閉じ拳で額を叩く。
- (9) 目を閉じ親指の付け根で額を叩く。

上記(1)～(9)について、予備調査から得られた回答をもとに設定した次の16項目の中から回答を選んでもらうという調査方法をとった。

- 1.目がまわった、2.酔っぱらった、3.頭が混乱した、4.はずかしい、5.つつましい(礼儀正しく、しとやか)、6.怒っている、7.嫉妬している・やいている、8.女房(妻)がこわい、9.悪魔、10.疲れた、11.おろかで

はずかしくて見るができない、12.過失(あやまち)、13.困った、14.疑い、15.特別の意味はない、16.そのしぐさはしない。

<しぐさ文化2>

次の「しぐさ」は何を表すか。

- (1) 目を閉じ額や眉や目を親指と人差指で擦る。
- (2) 人差指を自分の鼻に向ける。
- (3) 人差指または親指を自分の胸に向ける。
- (4) 話し手が話をしながら人差指を鼻の下にもっていく。
- (5) 話し手が話をしながら人差指を小鼻(=鼻の下部のふくらみ)にもっていく。
- (6) 聞き手が話を聞きながら人差指を鼻の下や横にもっていく。
- (7) 聞き手が濡らした人差指を眉につける。
1.疑わしい、2.疲れた、3.自分自身を差し示す、4.真実をのべていない、5.信用できない、6.ためらい、7.特別な意味はない、8.そのしぐさはしない。

<しぐさ文化3>

次の「しぐさ」は何を表すか。

- (1) 人差指を自分の鼻の下にあてて押し上げる。
- (2) 片手の拳に他の拳をかさねて鼻を高くする。
- (3) 片手の拳を鼻の上に乗せて、ねじ回す。
- (4) 鼻に親指をあて他の4本の指を広げて小さく振る。
- (5) 鼻に親指をあてて他の4本の指を広げ、その先に他の手の親指をつけ4指を広げて両手を小さく振る。
- (6) 耳に親指をあて4指を広げて小さく振る。
- (7) 舌を出し、耳に親指をあて4指を広げて小さく振る。
1.生意気だ、2.いばっている、3.目立ち

たがる奴だ, 4.へつらう (=媚びる, おべっかをつかう), 5.馬鹿だ, 6.くそつたれ (=相手をいやしめ馬鹿にすることは) 7.拒絶 (=相手の希望や要求を絶対に受け入れない), 8.特別な意味はない, 9.そのしぐさはしない。

<しぐさ文化4>

次の「しぐさ」を何と呼ぶか。

- (1) 肩から先の部分を真直ぐ上まで挙げる。
- (2) 肘を曲げ手の平をまっすぐ上まで挙げる。
- (3) 右肘を曲げたまま手の平をまっすぐ上まで挙げ, 左手は聖書の上ののせる。
- (4) 片方の手の拳を腰に置き, 片方の拳を勢いよく頭上に突き出す。
- (5) 口ぐらいの高さで両手を握り合わせて軽く振る。
- (6) 顔を前方に向け, 肘を曲げ垂直に挙げた手の平を前方に向けたまま, まっすぐ前に倒す。
- (7) 両腕を肩の高さにまっすぐまたは前方へのぼし, 手の平を前方に向ける。
- (8) 片腕をまっすぐのぼして腰の真横か少し下におく(手の平は前方に向けて)。
 - 1.手をあげる(賛成のしぐさ), 2.腕をあげる(賛成のしぐさ), 3.宣誓をする,
 - 4.「おめでとう」のしぐさ, 5.「進め」のしぐさ, 6.「生まれ」のしぐさ, 7.敬いの気持ち,
 - 8.国旗掲揚の時のしぐさ, 9.正直を表す,
 - 10.誠実を表す, 11.無実を表す, 12.自分自身を表す, 13.絶対にダメなことを表す,
 - 14.その他。

3 小文化の体系化

前節の調査項目に対する回答の分析結果をもとに, 文化の体系化に触れることにする。<しぐさ文化1>の日本人の回答のデンドログラム

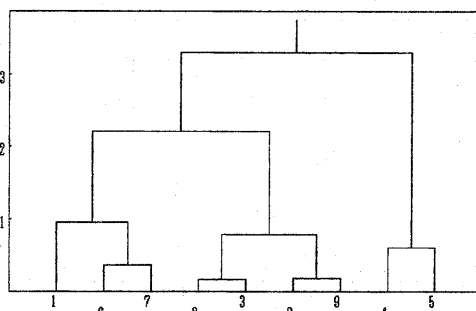


図1 日本人若年層の<しぐさ1>

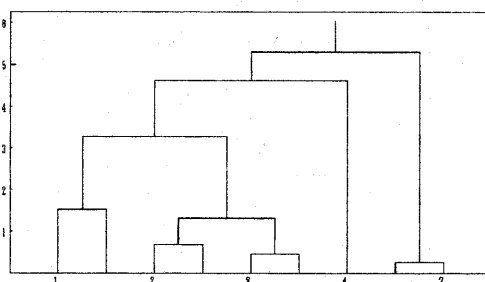


図2 外国人若年層の<しぐさ1>

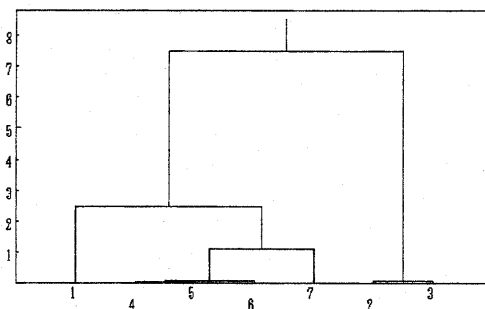


図3 日本人若年層の<しぐさ2>

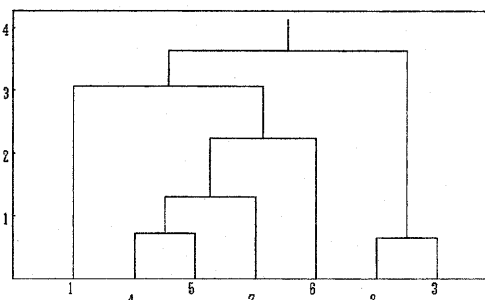


図4 外国人若年層の<しぐさ2>

ムを図1に, 外国人の回答のそれを図2に示す。

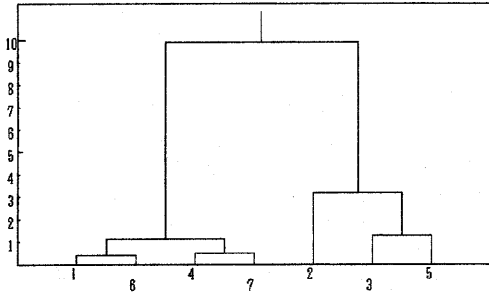


図5 日本人若年層のくしぐさ3>

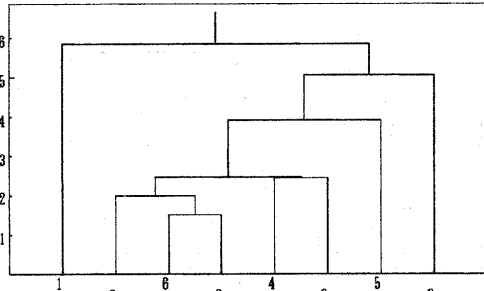


図6 外国人若年層のくしぐさ3>

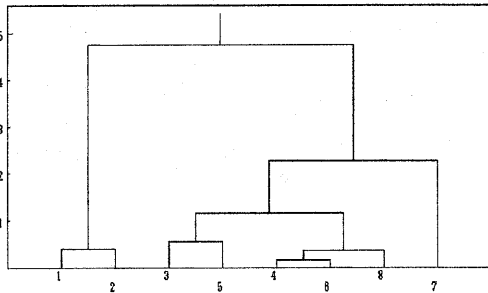


図7 日本人若年層のくしぐさ4>

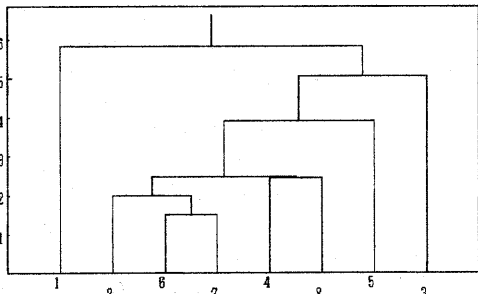


図8 外国人若年層のくしぐさ4>

被験数が異なるため単純な比較はできないが、いが、図1と図2ではクラスターの構造が

違う。(4)「手の平や手の甲で口を覆う」と(7)「頭を少し傾け片手または両手で目を覆う」の認知に、日本人と外国人では大きな差が存在したからである。日本人では、(5)「話し手が話をしながら人差し指を小鼻にもっていく」が意味的に近いところに位置づけられているのに、外国人では、(5)と(7)が近くに配置され、(4)が孤立している。

<くしぐさ文化2~4>のデンドログラムを図3~8に示す。<くしぐさ文化2>については、図3と図4では意味的距離に差はあるものの、枝分かれの状態はきわめて似ており、日本人と外国人との認知差の小さいことが分かる。

ところが<くしぐさ3>では、両者の意味構造は根本的に異なっている。日本人では「(2)(3)(5)」が部分体系をなすのに対し、外国人では「(2)(6)(7)」のの意的距離が近い。

<くしぐさ3>(7)で「耳に親指をあて4指を広げて小さく振る」のは「ロバの耳」の意で、英国の子供などが普通は「拒絶」の意の舌を出しながらその動作するという。図5と図6では、枝分かれが著しく違っている(両者の認知に違いがある)。ただし、どちらの図でも(6)と(7)が近くに位置しているので、被験者が質問に正確に答えていることは容易に読み取れる。

図7では「(4)(6)(8)」が部分体系をなしている。<くしぐさ4>の(1)と(2)は意味的な関連性が高いが、「(4)(6)(8)」については一般的には緊密度は低いと予想される場所である。他の項目との意味関係で相対的に近くに位置づけられたにすぎないと見ていいだろう。

次に、小文化体系の結合について。日本語であれ英語であれ、類義語がいくつか集まって語彙となり、それらがまた結合しあって、より大きな語彙を形成していく。文化にも、同じこと⁽⁶⁾がいがえるのであろうか？ それとも小文化体系を結合させると、部分体系は壊れてしまうのであろうか？

これを検証するため、図1～8の素データを日本人と外国人とに分けて結合させ、クラスター分析してデンドログラムを作成すると、「小文化は、その意味体系をほぼ保ったまま、他の小体系と意味結合していくことができる」という規則性を得ることができた。これが普遍的な一般原則になり得るかどうか、残る調査項目の分析を続けていきたい。

4 日本人の多文化認知

前節で扱った<しぐさ文化>は、第I期多文化調査 226 項目に対する被験者の認知類型レベルでは、どの辺に所属する小文化なのであるか。顕著な類型差が見られたのは、日本人・外国人ともに5類型であった。その類型ごとに小文化群を配列し、<しぐさ文化>には下線を付して示す。

A 伝統文化継承型(日本人の伝統的な認知を継承している)

太陽の周近的意味、虹の七色、桜の印象、民話に出てくる良い動物、民話に出てくる悪い動物、動物の印象、日本の伝統的な手のしぐさ、目は心の窓、上目づかい、畳や床への座り方、歩く姿勢から受ける印象、立ち話の印象……

B 軽度の西欧文化型(西欧文化の影響は軽度であり、日本人の伝統的認知を受け継いでいる)

太陽・月・星の周近的意味、太陽・月の色、茶封筒の色も黄色、オレンジ色の領域、赤い果物の代表、顔の、形から受ける印象、立ち食いの印象、手の平の表意識、人差指のしぐさ、楽座、亀居(かみ、爪先を崩し両足の間に尻をすえて座る)、しゃがみ方、立つか座るかの選択(道脇の石仏を拝む、墓前で手を合わず)、和服を着た日本女性が小股で歩いていく……

C かなりの西欧文化型

星の色、魚の領域、体型から受ける印象、顔のつくりから受ける印象、関心の集まりやすい人体部位、セーターの着方、上着の着方、スープの飲み方、向かい合って話すときは相手の目を見て話す、うれしさを表現する動作、椅子への座り方、日本女性が少し頭を下げ2、3m先を見て立っている姿の印象(気力がないう、偏屈な感じだ)……

D 異文化理解型(理解はするが受容はしない)

西欧型の手・腕の大きなしぐさ(右手を心臓の上に当てる、など)、カット・アイ(相手を横目で見ながら斜めに切るように視線を動かす)……

E 異文化理解難型(理解することさえ難しい)

日本の習慣にない手のしぐさ(英国人などが手でする注意喚起や軽蔑のしぐさ、など)、日本の習慣にないしぐさ(頭を前に傾け8の字を描くように回す、男性が笑うとき手で口を隠す、など)、とても怒ったとき両手を放り上げ頭を下げる、西欧人の身構え……

5 外国人の多文化認知

日本人の認知類型とかなりの分野で一致していることが分かった。

A 伝統文化継承型(日本の伝統文化をほぼ日本人並みに捉えている)

太陽の色、虹の七色、太陽・月の色、民話に出てくる良い動物の名前、民話に出てくる悪い動物の名前、犬などの動物から受ける印象、手のしぐさの一部。

B 軽度の西欧文化型(西欧文化の影響は軽度であり、日本人の伝統的認知型並みに捉えている)

オレンジ色といえる色彩領域、黄色の領域(茶封筒の色を黄色の領域に含む者が少しいる)、赤い果物の代表をリンゴとする、顔

の形から受ける印象、人差指のしぐさ、体型から受ける印象。

C かなりの西欧文化受容型(西欧文化の影響がかなり強い)

星の色、魚と呼べる領域、セーター・上着の着方、スープの飲み方。

D 異文化理解型(理解はするが受容しない)
手や腕の大きなしぐさ(右手を心臓の上に当てる、など)、カット・アイ(相手を横目で見てから斜めに切るように視線を動かす)。

E 異文化理解難型(理解しがたい)
頭を前に傾け8の字を描くように回す、男性が笑うとき手で口を隠す。

この多文化調査において、日本人学生と留学生とで著しく認知が異なった項目はそう多くはなかった。

(1) 「すらっとして背の高い人」から受ける印象

日本人若年層は「素敵だ」が58.5%、「活動的だ」が20.8%、「知的だ」が23.6%であったのに対し、外国人若年層それぞれ5.9%、29.4%、0%であった。

(2) 顔の形から受ける印象

日本人の27.8%が「面長の顔」を「知的だ」と思うのに対し、外国人は0%であった。

(3) 「賛成」の手のしぐさ

日本人の48.1%が「肩から先の部分をまっすぐ上まで挙げる」ことを「手を挙げる」で表現して「賛成」などを意味し、外国人も52.9%がそう理解しているが、「肘を曲げ手の平をまっすぐ上まで挙げる」ことも「手を挙げる」と答えた日本人の50.5%に対し、外国人は8.8%に過ぎなかった。このしぐさは「腕を挙げる」だと理解している外国人が23.5%いた。

6. 小文化におけるコミュニケーション変数
文化は、コミュニケーションにおいて成立

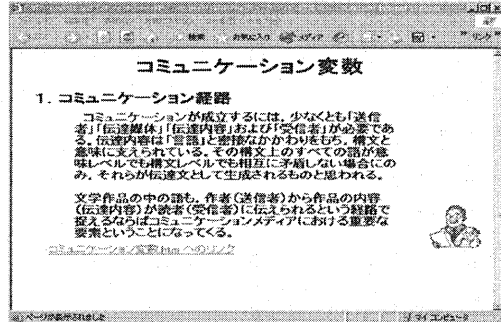


図9 コミュニケーション経路

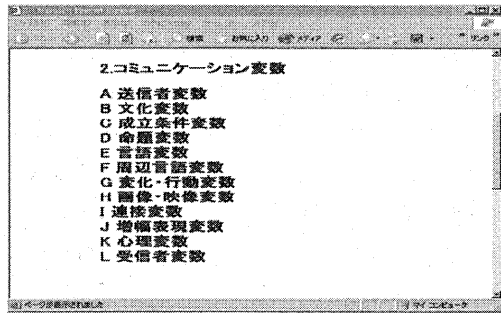


図10 コミュニケーション変数



図11 関連科目へのリンク例

するものと考えられる。第1期多文化調査から得られたコミュニケーション変数は、A送信者変数、B文化変数、C成立条件、D命題変数、E言語変数、F周辺言語変数、G行動・変化変数、H画像・映像変数、I連接変数、J増幅表現変数、K心理変数およびL受信者変数の12種(図10)であり、コミュニケーションは、それら変数の集合体として調査・解析することが可能となる。

文化変数は、コミュニケーションのレベルを制御する要素であって、人間の普遍的コミュニ

ケーション形態が時代や民族や状況によって個別化することに強く関与する変数である。具体的には、

- a 異文化性：a1 現在の居住地，a2 言語形成期の居住地，a3 儀礼，a4 居住地の文化度，a5 言語形成期の居住地の文化度，a6 異文化接触度，b7 民族性，a8 移民性，a9 語族（ウラル・アルタイ語族，シナ・チベット語族……）a10 異言語度，a11 宗教，a12 歴史性，a13 社会階層，a14 年齢層，a15 性別志向（男性向け，女性向け）……
- b 支配コード：b1 日常コード，b2 論理コード，b3 評価コード，b4 感情コード，b5 虚構・仮想コード，b6 回想コード，b7 想像コード，b8 未経験コード，b9 歴史コード，b10 位相コード，b11 文芸コード，b12 言語コード，b13 文芸コード，b14 文化コード，b15 音声コード，b16 音楽コード，b17 画像コード，b17 映像コード……

文化をこのような変数群と見ることにより，文化を「成立条件変数」「言語変数」「行動・変化変数」「画像・映像変数」「増幅表現変数」「心理変数」などの集合となり，時系列上で刻々と姿を変えていくコミュニケーション変数の波動や移動平均線などとして軌跡を視覚化することができる。

最近では，さまざまな言語教材や文化テキストをデジタル化して大学の授業に取り入れる試みも多くなってきた。図 9～11 は「メディア意味論」で使用している画面の一部である。情報文化論もコミュニケーション論も，新しい理論的發展の時期にさしかかった感がある。それらの支援を受けながら，第Ⅱ期以降の多文化調査の結果をまとめ，稿を改めて論じたい。

7 まとめ

文化は意味論的に数量化し，体系化して視覚的に捉えることができる。文化は「成立条件」

「言語」「行動・変化」「画像・映像」「増幅表現」「心理」などの要素とともにコミュニケーションを形成する。

注

- (1) えら 国際交流基金日本語国際センター『中級日本語』
- (2) ここでの便宜的な意味領域の設定に過ぎない。
- (3) 情報文化学会『情報文化学会連合研究会論文集』第1号，33-36頁。
- (4) 第Ⅱ期，Ⅲ期調査では，次のような項目も調査したが，これらは第Ⅰ期調査では未調査であり，調査結果の連続性に欠けるため，本稿では扱わなかった。1.指を立てる，2.親指を下に向ける，3.人差指と中指をからめる，4.両手の人差指を交差させる，5.人差指を頬にあててひねる，6.人差指で目尻を引っばる。
- (5) 外国人留学生は被験者数が少ないため，分析結果は参考にすぎない。小文化分析の視点の一つとして提示した。
- (6) 日本語語彙や多文化の小体系の結合に関する大規模な調査と実証的な研究成果の公開は，管見に入らない。

参考文献

- 1 竹井邦彦『日本色彩辞典』笠間書院，1973年
- 2 金田一春彦『日本人の言語表現』（講談社現代新書）1975年
- 3 田中春美他『言語学のすすめ』大修館書店，1960年
- 4 齊藤正二『植物と日本文化』八坂書房，1979年
- 5 伊原昭『古典文学における色彩』笠間書院，1979年
- 6 大岡信編『日本の色』朝日新聞社，1979年

- 7 前田雨城『色染と色彩』法政大学出版局, 1980年
- 8 光延明洋「色名の言語人類学」『言語生活』392号, 筑摩書房, 1984年
- 9 村山貞也『人はなぜ色にこだわるか 知っているようで知らない色の色々』KKベストセラーズ, 1988年
- 10 三上章『脳はどこまでわかったか』講談社現代新書, 1991年
- 11 福井勝義『認識と文化——色と模様』の民族誌』東京大学出版会, 1991年
- 12 伊原昭『文学における色彩』朝日新聞社, 1994年
- 13 平田喜信・島崎壽『和歌植物表現辞典』東京堂出版, 1994年
- 14 橋田浩一・安西祐一郎・波多野誼余夫・田中啓治・郡司隆男・中島秀之『岩波講座認知科学1 認知科学の基礎』岩波書店, 1995年
- 15 西尾章治郎・岸野文郎・塚本昌彦・山本修一郎・石田亨・川田隆雄『マルチメディア情報学12 相互の理解』岩波書店, 1999年
- 16 郡司隆男・阿部康明・白井賢一郎・坂原茂・松本裕治『意味』岩波講座 言語の科学4, 1998
- 17 長尾真・安西祐一郎・神岡太郎・橋本周司『マルチメディア情報学の基礎』岩波講座マルチメディア情報学1, 1999
- 18 西尾章治郎・岸野文郎・塚本昌彦・山本修一郎・石田亨・川田隆雄『相互の理解』岩波講座 マルチメディア情報学12, 1999
- 19 山梨正明『認知言語学原理』くろしお出版, 2000年
- 20 金水敏・今仁生美『意味と文脈』現代言語学入門4, 岩波書店, 2000
- 21 西尾章治郎・田中克己・上原邦昭・有木康雄・加藤俊一・河野浩之『情報の構造』情報学8, 2000年
- 22 安西祐一郎・長尾真・坂村健・大槻説乎・山本正信・島脇純一郎『自己の啓発』岩波講座 マルチメディア情報学11, 2000年